

小学校の総合的な学習の時間の
実態と今後の課題
～古平町立古平小学校を事例として～

社会学部地域社会学科
20LC026 小路 楓世

目次

緒言	1
第1章 先行研究の検討	3
第2章 総合的な学習の時間の歴史と意義	5
第3章 北海道内での総合的な学習の時間事例	7
第4章 古平町立古平小学校の総合的な学習の時間の展開と鯨漁	9

4-1	北海道教育委員会からの目標設定	9
4-2	古平町鯉漁の歴史	9
第5章	ヒアリングデータの分析	11
5-1	調査概要	11
5-2	KH-coder による分析	11
第6章	小学校4年生の振り返り作文の分析	19
第7章	提案	22
	おわりに	23
	参考文献	24
	謝辞	25

緒言

小学生の総合的な学習の時間は、子どもたちが幅広い知識やスキルを身に付け、自分自身を総合的に育てるための時間である。これは、社会的なニーズや教育政策の変化に対応して、全国的に導入されたものである。かつては教科間の垣根が厳しかったため、ただ単に知識の量を増やすことが主眼であり、社会や人間関係のような、学問の範疇外の領域にとっても弱かったとされていた。しかし、現在の社会では、個々人の多様な価値観や文化、さらには科学技術の急速な発展など、大きな変化が起こっている。そのため、子どもたちが社会に適応できるよう、総合的な学習の時間が導入された。

札幌市のホームページでは、「市立学校では、教科の枠を超えた横断的・総合的な学習、保護者や地域人材等の外部人材を活用した実践を行うなど、総合的な学習の時間の充実に努めている」¹⁾として、以下のような内容が推奨されている。

(1) 横断的・総合的な課題

- 国際理解 世界の国々の生活・文化等に関する学習のほか、小学校における外国語に関する学習を含む。
- 情報 情報手段の活用のほか、情報モラルなど情報にまつわる今日的課題に関する問題解決的な学習を含む。
- 環境 自然・生き物やゴミ処理・リサイクルに関する学習のほか、環境破壊や資源・エネルギー問題等を含む。
- 福祉 福祉制度等に関する学習のほか、福祉ボランティア等の体験的活動を含む。
- 健康 食やスポーツなど健康の大切さに関する学習のほか、性に関する学習や安全等に関する学習を含む。

(2) 児童生徒の興味・関心に基づく課題

将来の夢、生命の神秘など、児童生徒がその発達段階に応じて興味・関心を抱く課題に関する学習。

(3) 地域や学校の特色に応じた課題

地域の伝統、文化、行事、生活習慣などにかかわる、各地域・学校に固有な生活上の諸課題に関する学習。

(4) 職業や自己の将来に関する課題

自己の生き方、将来を具体的、実地的なものとして考え、切り開く資質や能力、態度の育成に関する学習。

総合的な学習の時間という科目は、科目の垣根を超えた「日常生活体験」「社会体験」「情報・表現」「体育・生活」の4つを柱として、さまざまな学びが取り入れられている。例えば、家庭科ではクッキングや掃除、自己管理、音楽や美術では感性や表現力、体育では健康やスポーツマンシップ、社会科では地域や国、世界、歴史、文化などを学ぶ。そして、総合的な学習の時間は、単なる知識の詰め込みだけでなく、子どもたちが自分自身を知り、個性を發揮し、社会的な問題について考えるための場でもある。また、他の子どもたちとのコミュニケーションや協働を通じて、社会性やコミュニケーションスキル、自己主張力などを身に付けることができる。

総合的な学習の時間は、子どもたちが将来的に社会で活躍するための基礎を作る重要な時間であり、教師や保護者の方々も積極的に関わることで、より有意義な学びの場になることが期待されている。

しかし、学校間により地域や資源の違いから学習内容に差があるとい問題も実際にはあるのではないかと。都会と田舎では互いに地域資源にも差があることや、そもそも地域にはそれぞれ違いがあるため学習内容を同じにするというのは厳しいのではないかと。

本来、小学生の総合的な学習の時間の目的は、知識や技能だけでなく、豊かな人間性を育むことでもある。具体的には、以下のような目的が挙げられる。

- ・健全な人間形成の促進社会や自然環境に関心を持ち、理解を深める力の育成
- ・個性豊かな人間として、自己認識を深めながら社会と交流する力の育成
- ・調べ、発表する力、考え、判断する力、問題を解決する力の育成
- ・グループでの活動や協調性の育成

私は大学生生活4年間で、大きく分け、社会学と教育学の二つを学んできた。社会学では地域との関わりや、フィールドワークを通じて地元の人と関わることでそこにしかない地域特有の文化や伝統の存在や人と人との繋がり大切さを実感した。教育学では教員免許取得に向け、教育実習や特別支援教育、演習を通じて教育の在り方や変化について学びを深めてきた。総合的な学習の時間は他の教科と比べても、地域の人と関わる機会も多い為、大学で学んだ内容を結びつけることができると考え本論文のテーマを設定した。

本論文では、北海道古平古郡平町でかつて行われていた鯉漁を題材とし、総合的な学習の時間の学習を進めている古平町立古平小学校をモデルにし、実際に行われている総合的な学習の時間の学びを事前と事後に分け、観察・分析・評価の3つのポイントから調査していく。

以下では第一章先行研究の検討について。第二章総合的な学習の時間の歴史と意義。第三章道内での総合的な学習の時間事例。第四章古平町立古平小学校の総合的な学習の時間の展開と鯉漁。第五章ヒアリングデータの分析。第六章小学校4年生の振り返り作文の分析。第七章提案。以上のような流れで執筆していく。

(注)

1) 札幌市 HP。

<https://www.city.sapporo.jp/kyoiku/top/sougougakusyu/sougougakusyu.html>

第1章 先行研究の検討

ここでは小学生の総合的な学習の時間に関する研究について紹介し検討する。九州女子大学人間科学部人間発達学科、佐方はるみ氏の以下のような研究結果がある。総合的な学習の時間を価値あるものにする課題は大きい。学校全体での単元構成や教科横断的なカリキュラムの作成は時間と連携の難しさがあり、多忙な教員が実践する余裕がない。総合的な学習の時間に教師が価値を見だし、実践に移すことが重要であり、これが新たな課題を生む。コロナ禍での制約もあるが、コンピュータの活用や情報収集から学びを始められる。学生のアンケートでは地域中心の学習が広く体験され、中学校の職場体験も総合的な学習の時間の一環となっている。小中連携が効果的で、体験活動は必要条件とされている。大学講義としての総合的な学習の時間には課題があり、その価値理解が難しい。学生が自己を見つめ直す機会や実践から学ぶ必要があり、コロナ禍への対応も必要である。一

人一台のタブレットやプログラミング教育などの ICT 教育も重要であり、時代のニーズに応えた学習が求められている。また、その他にもさまざまな研究がある。

小学生の総合的な学習の時間に関する先行研究は、以下のようなものがある。

第一に、総合的な学習の時間の意義に関する研究。小学生にとって、総合学習は、学校で学ぶだけではなく、実生活で必要とされる知識や技能を身につけることができることが、多くの研究で指摘されている。

第二に、総合的な学習の時間の実践に関する研究。実際の総合学習の実践においては、主体的・対話的で深い学びの場を提供することが重要であることが、多くの研究で言及されている。また、ICT ツールを活用した総合学習の取組も報告されている。

第三に、総合的な学習の評価に関する研究。総合学習の評価においては、個人の能力や取り組み方が重要であることが指摘されている。また、評価方法に関しても、ポートフォリオや自己評価など多角的かつ個別化された評価が必要であることが多くの研究で提唱されている。

以上のように、小学生の総合学習に関する先行研究では、主体的・対話的で深い学びの場を提供し、多角的かつ個別化された評価を行うことが重要であることが指摘されている。また、ICT ツールを活用した総合学習の取組みも報告されている。

全国のさまざま学校にて行われている総合的な学習の時間だが、先行研究を踏まえうえで以下の問題が挙げられる。

第一に、実用性が低い問題が考えられる。総合的な学習の時間では、健康・体育、音楽、生活、福祉、環境・社会など多岐にわたるテーマから問題が出されるが、それらの問題は生活や社会に役立つ内容とは限らない。したがって、子どもたちが学んだことを今後、実際の生活に役立てることができず、授業の効果が薄れてしまうのではないか。

第二に、言葉の理解が困難な問題が考えられる。小学生は6歳から12歳までと、まだまだ言葉の理解力が高いとはいえない。総合的な学習の時間で出される問題は、専門的な用語や難しい言い回しが多く、子どもたちが理解しにくい場合がある。そのため、問題を理解できずに解けない状況に陥ってしまうこともあるのではないか。

第三に、課題の幅・内容に関する問題が考えられる。総合的な学習の時間では、さまざまな課題が与えられる。このため、時間内に問題全てを解くことが非常に困難な場合がある。また、問題が幅広すぎて、一部しか解けなかったとしても内容的には不十分な場合があり、学習効果が薄いといえる。また、各学校や各教員、環境（地域）によって内容の充実度に差が生まれている。また以下文部科学省の報告でも、学校により指導工夫や校内体制、整備等に格差があり、総合的な学習の時間の指導方法が個々の教師任せになったり、学校全体で取り組む体制が整っていないなど、学校によって差があるという問題点が挙げられている。

第四に、評価の難しさに関する問題が考えられる。総合的な学習の時間で学んだことは、評価することが難しい。そのため、授業の効果を正確に測定することができず、教育効果が定量化できない状況になる。

これらの問題を解決するためには、より実用性の高い、言葉や課題の幅が狭い問題を出す、目標に合わせた評価を行うなど、より効果的な教育方法を模索する必要がある。そのため、今述べた中の問題も重視していくことが評価にも繋がるのではないか。

第2章 総合的な学習の時間の歴史と意義

総合的な学習の時間は、小学校および中学校において、2002年4月から導入され、学習指導要領の改定に伴いその時間数に変遷してきた。小学校3、4年生では2002年当初、年間105単位時間で実施され、その後2011年の改定で小学校3年生から6年生まで70単位時間に減少し、2020年の新学習指導要領でも同様の時間が継続された。これにより、「総合的な学習の時間」は2002年の初導入時から小学校・中学校共に時間が削減され、その影響で理科や算数などの科目の時間が減少したと考えられる。これは、PISAなどの学力テストで指摘された「学力低下」対策の一環として、理科や算数などの時間数を増やす方向への変化が生じた結果と見なすことができる。

指導要領が改訂された平成29年度の改訂経緯としては、現在および将来の子供たちが成人し、社会で活躍する際には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えると予測されている。生産年齢人口の減少やグローバル化、技術革新などにより、社会構造や雇用環境が急激に変化し、予測が困難な時代となっている。特に、急速な少子高齢化が進む中で、成熟社会を迎える我が国では、一人一人が持続可能な社会の担い手として多様性を活かし、質的な豊かさを伴った新しい価値を生み出すことが期待される。

この変化の中で、人工知能（AI）の進化が注目されており、AIが知識を概念的に理解し思考し始めている可能性があることから、この進化は雇用や学校での知識獲得にも大きな影響を与え、人間の思考の特長である目的の設定や判断に対する強みを再確認させている。

このような時代において、学校教育は子供たちが変化に積極的に対応し、協働して課題を解決し、情報を概念的に理解して新たな価値に結びつける能力を養う必要がある。しかし、教育者の世代交代や学校内の経験や知見の継承が課題となり、環境の変化により学校が抱える課題も複雑化している。これらの課題に対処するため、中央教育審議会は2014年に新しい学習指導要領の在り方について諮問を行い、2016年に「中央教育審議会答申」を示しました¹⁾。

更に、総合的な学習の時間で探究のプロセスを意識して学習活動に取り組んだ児童ほど各教科の成績が高い傾向にあるというデータがある。だからこそ、総合的な学習の時間は教育の中心とも言え、内容もそれに沿ったものを提示してあげることが求められる。

また、総合的な学習の時間の成立の歴史が、教育家庭新聞の一部にて取り上げられている。21世紀において、社会経済の変化、人口増加、少子高齢化、地球的環境問題、国際問題などが人類の生存と尊厳にかかわる重要な課題となっている。日本の教育は、近代化政策においては「西欧に追い付け追い越せ」を目指す知識蓄積型のもだったが、戦後には民主的人格形成を目指す一方で、高度経済成長時代には「産業社会に役立つ知識と技術を習得する人材養成」に焦点を当てた知識適用型の教育へと変化した。

冷戦構造の崩壊と経済の崩壊により、21世紀は不透明で不確実な社会となり、人間の生き方に対する指針が失われている。この時代に登場したのが「総合的学習」で、国際理解、情報、環境、福祉、健康といったテーマを通じて、従来の教科カリキュラムでは扱いにくい「総合性」を備えている。総合的学習は、21世紀の生きる力として、体験的創造的学力、情報収集・表現・発信する学力、社会的情意的能力（参加共生学力）、バランスのとれた体力と気力（生態的学力）の総合化を通じて問題解決能力を養うことを目指している²⁾。

国の方策と成立の歴史をみても今後の社会でさまざまな変化に対応していく力や2045年問題とも言われている、「AIが人間の知能を追い越す」ということなどの対策でもあるだろう。グローバル化や就職難ともいわれる時代になり、今の小学生が成人するころには現状よりも遥かに厳しい社会になっていくのではないか。だからこそ、主教科以外の部分でも広い視野をもち、さまざまな問題に目を向けることが必要である。それこそが総合的な学習の時間の意義といえるのではないか。

(注)

1) 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編。

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afie1dfile/2019/03/18/1387017_013_1.pdf

2) 教育家庭新聞より。

<https://www.kknews.co.jp/rensai/sougou/reso9905.htm>

第3章 北海道内での総合的な学習の時間事例

ここでは北海道内で行われている小学校の総合的な学習の時間の事例をピックアップしていく。一つ目は北海道北見市にある北見市立上仁頃小学校である。もう一つは、札幌市にある札幌市資生館小学校である。どちらも小学校高学年に対する授業であり、また地域としても違いがあるので以下の二つを紹介する。

【事例1】北海道北見市立上仁頃小学校

北海道北見市立上仁頃小学校では第5、6学年の複式学級で「閉校」という単元のもと総合的な学習の時間が展開された。またここではマインクラフトカップというものに応募するというのが最終形態であった。授業の展開としては4つに分けられ、展開1では「閉校後の校舎の活用方法を考えよう！」というテーマのもと、閉校後の校舎をどのように使

ってほしいのか案を出し合っていた。出された意見をより具体的にイメージし、実現可能なのか、活用はできるのかというふうに話し合いを進めた。展開2では「SDGsについて学ぶ」ということで北見市が出している3つのテーマ（全ての人に健康と福祉を・エネルギーをみんなにそしてグリーンに・陸の豊かさを守ろう）に沿って閉校後に北見市に何ができるかと話し合いを進めた。まとめた意見をどのようにMinecraftで表現するかを話し合う。そして、展開3では「自分の思いやアイデアやを形にする」というテーマのもと、Minecraftを用いて自分たちの思いを表現する。ここでは、どの部分を作成するのかを役割分担して決め、チームで作成。毎時間授業後に各成果を伝え合い、より良いものにしていくために周囲の意見を取り入れた。展開4では「閉校後の校舎の活用を提案しよう！」ということでMinecraftカップ2021に応募することとYoutubeチャンネルの投稿を行った。以上が簡単な授業展開である。1) 上仁頃小学校の総合的な学習の時間ではロイロノートやビデオゲームアプリMinecraftなどのICTツールを用いてより生徒にわかりやすく、立体的に想像させるという工夫。更にディスカッションの際にはロイロノートのシンキングツールを用いて多くの意見の反映、分類を行っている。廃校になる建物を次世代を担う若者が、コンテストではあるが意見を出し、実現に向けるといった学びは地域に密着しているといえるのではないかと。

【事例2】北海道札幌市資生館小学校

北海道札幌市資生館小学校では第5学年で「『市電の走る街札幌』～市電の今・昔・未来は?～」という単元のもと総合的な学習の時間が展開された。市電の乗車体験や交通資料館見学等を通して市電の今・昔・未来を考えるというのが主な内容である。さまざまな公共交通機関の普及により、路線の縮小などがされていることは小学生にはほとんど知られていないからこそ今と昔を知り、未来について考えるというのがねらいである。展開としては大きく3つ。展開1は「市電との出会い」というテーマのもと、個人それぞれが市電を見たり、乗ったりして市電の面白さやイメージを膨らませる。展開2では「市電の今・昔を探ろう!」というテーマから市電の車両、運転手等を調べ、実際に電車事業所へ行きインタビューし、交通資料館へ行くというのが大まかな流れである。最後に展開3では「市電の10年後を考えよう!」というテーマで市役所の方にインタビューしたあとに市電プランを札幌市役所に提出するというのが最終課題である。2) 以上が簡単な授業展開である。資生館小学校の総合的な学習の時間は地域のヒトと接する機会が多く、社会に出て調査したり、参与観察するという方法を中心に展開している。インタビューや資料調査を通じて、生徒たちは調査力や発表力を向上させる機会がある。これは将来の学習や社会生活において役立つスキルの一つでもある。体験学習を取り入れているため、市電の乗車体験や交通資料館の見学など、実地での学習機会が豊富である。これにより、生徒たちは単なる知識の取得だけでなく、実際の体験を通して学ぶことができる。札幌資生館小学校は中央区に位置している。都会ならではのモノに注目している点が深い学びに繋がっているのではないかと。一方で、さまざまな活動を組み込んだり、調査やプラン提出まで含めた段階的な展開があるため、授業時間が全25時間（展開1：5時間、展開2：10時間、展開3：10時間）だと十分な深さで各テーマを掘り下げることが難しいのではないかと。そこからさらに、提案資料を作成し提出するというのは小学校5年生ということを考えてときには厳しいのではないかと。

第4章 古平町立古平小学校の総合的な学習の時間の展開と鯉漁

4-1 北海道教育委員会からの目標設定

総合的な学習の時間の問題ともいえる学校間での内容に差があるのではないかと指摘されることがある。確かに、地域によって歴史や文化の違いや扱うことができる題材も限られてくる。しかし、テーマといってもさまざまなものがあり、学校間により地域の特性に合わせたプログラムの内容を見直す必要があるのではないか。実際に、北海道教育委員会は総合的な学習の時間の課題設定は各学校で違いは出るが、地域（ヒト・モノ・コト）に注目することがうたわれている。地域資源に対して学んで観察していくことが求められるということだ。以下では北海道教育委員会が設定している各学校に定める目標を記載する1)。

各学校に定める目標

「探究的な見方・考え方を働かせ、身の回りや町（地域）に目を向け、様々な人と関わることを通して、自分の設定した課題を粘り強く追究し、自分を見つめ、自己の生き方を考えることができるようにするために、以下の資質・能力を育成する。」1)

- (1) 地域の人、もの、ことに関わる探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付けるとともに、地域の特徴やよさが分かり、それらが人々の努力や工夫によって支えられていることに気付く。
- (2) 地域の人、もの、ことの中から問いを見だし、その解決に向けて見通しをもって調べ、集めた情報を整理・分析し、根拠を明らかにしてまとめ・表現する力を身に付ける。
- (3) 地域の人、もの、ことについての探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、持続可能な社会を実現するための行動の仕方を考え、自ら社会に参画しようとする態度を育てる。

学校の目標は、生徒が探究的な思考を身につけ、身の回りや地域に注意を払い、様々な人と交わりながら、自ら設定した課題に対して粘り強く追求し、自己を見つめ、生き方を考える能力を養うことであるという内容である。

4-2 古平町鯉漁の歴史

北海道古平町の鯉漁（表 4-1 参照）は、地域社会に深く根ざした重要な産業であった。江戸時代初期より古平場所が設置され、ニシン漁で栄えた地である。明治に入って開拓使出張所が置かれるなど東積丹地域の中心地として発展を続けたが、ニシンの漁獲が激減した昭和 30 年ころを境に町人口は減少へと転じている。

この町の歴史において、鯨漁は豊かな海の資源を活かし、地元経済に大きな影響を与えていた。鯨は豊富で栄養価が高く、特に冬季においては重要な食糧源であった。季節ごとに異なる漁法が用いられ、春季には沿岸の浅瀬での巻き網漁や定置網漁が盛んだった。夏季になると、遠洋への出漁が行われ、船団を組んでの大規模な網漁が展開された。漁業の成功は地域経済に好影響をもたらした。漁師たちは収穫を地元で消費し、余剰分は他地域へ供給した。これにより、古平町は独自の漁業文化を築き上げ、地域住民の生活に欠かせない存在となった。

鯨漁の成功には漁師たちの技術や知識だけでなく、地域社会全体の協力と結束も欠かせなかった。漁期には多くの漁師が協力して仕事を進め、漁師同士の連帯感が根付いていた。これが地域コミュニティの形成と強化に繋がり、鯨漁は地元住民にとって誇りとアイデンティティの源となっていた。

しかし、近年の環境変化や資源の減少により、鯨漁は衰退の一途を辿っている。昭和中期から鯨が獲れなくなったため遠洋漁業を行うようになった。

漁獲量の減少は地域経済への打撃を与え、かつてのような繁栄が難しくなっている。また、現代の生活様式の変化や若者の地元離れも課題となっている。

次章では、古平町の鯨漁の歴史とその地域社会とのつながり、地域資源などを追究し、漁業の衰退と地域コミュニティについて学びをすすめている古平町立古平小学校の総合的な学習の時間の展開について授業の事前事後に分けて考察し、改善点や今後の総合的な学習の時間の授業の提案をしていきたい。学校が所在する地域の特性は異なるのだから、その特性をどのように「探求的な学習」に結び付けていくかという課題は、学校の学習プログラムを検討することによって明らかになると考えられる。

2023年度の当該授業について、観察・分析・評価を行い、地域における総合的な学習の時間について提言するものである。

表 4-1 古平町における鯨漁業の概略

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・1606年 ニシン漁が置かれる・1862年 禅源寺の造立・1869年 浜町に開拓使古平出張所が設けられる・1902年 古平郡に属する5町4村をすべて併せ二級町村制施行、古平町・1907年 一級町村制施行・1996年 ふるびら温泉開湯 |
|--|

(注)

1) 北海道教育委員会 HP より。

https://www.dokyoι.pref.hokkaido.lg.jp/fs/8/2/2/7/5/0/5/_/01_%E3%80%90%E3%82%B9%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%89%E8%B3%87%E6%96%99%E3%80%91.pdf

第5章 ヒアリングデータの分析

5-1 調査概要

2023年11月7日、古平町立古平小学校の小学4年生の総合的な学習の時間の授業を「ほえみくらす」という施設で行った(表 5-1 参照)。本授業では、地元の名士の3名(横野治氏、丹後藤雄氏、長谷川浩作氏)にお越しいただき、生徒は3グループに別れ講和を聞くというもの(児童は名士3人のうちいずれか一人の講話を聞く)。地元の名士は過去に古平で鯨漁を行っていた時代に活躍されていた地元の漁師の方たちだ。その観察・分析・評価のポイントは表 5-2 に示した(表 5-2 参照)。あらかじめ、名士の3名には児童からの質問項目を渡し、その質問の内容のもと講和をお願いした(表 5-3 参照)。話題提供リスト、質問項目は表以下である。

5-2 KH-coder による分析

次に各名士の講和の内容をテキスト型データ分析のソフトウェアである「KI-Coder」の分析のもと解釈していく。ここでは、KH-coder を用いてテキスト分析をおこなう。使用語は1,176語である (n=1,176)。

まずはじめに、筆者が求めた話題についてインタビューイーがどのように回答したのかをキーワードとして、抽出語150語の中から筆者が関連性のある語を抜粋し、コロケーション統計のスコア1位の語について、KWIC コンコーダンスによる文脈を探った (図5-1)。

まず、「ニシン」については、「獲れる」が関連性の強い語であった (スコア4.617)。

頻出語からキーワードとした語について、どのように語られていたのか、コロケーション統計のスコアから KWIC コンコーダンスによる解析では、次のような内容で語られていた。

お祝いの際にはお酒を飲み、ご馳走を食べながら、ニシンを獲りに行くことがあります。ニシンが手に入ると、それを現金で買い取ることもあります。また、米が不足している時代には、米を積んでくることもありました。古平ではニシンが取れなくなった際に、大型船が登場し、漁の対象が拡大しました。北海道の函館から北の方では、ニシンが取れる場所が広がり、漁業は発展しました。夏になるとニシンがいなくなるが、その後も、うにや、アワビ、なまこなど他の漁業も行い、生活を維持していました。これにより、漁業の多様性が確保されました。

次に「魚」については、「小さい」が関連性の強い語であった (スコア7.583)。頻出語からキーワードとした語について、どのように語られていたのか、コロケーション統計のスコアから KWIC コンコーダンスによる解析では、次のような内容で語られていた。

大きくなるにつれ、小さい魚や魚の卵を食べて成長する例があります。具体的な種類は言及されていませんが、これはニシンだけでなく、一般的な魚にも当てはまる行動です。

「船」については、「トン (t)」が関連性の強い語であった (スコア2.400)。

頻出語からキーワードとした語について、どのように語られていたのか、コロケーション統計のスコアから KWIC コンコーダンスによる解析では、次のような内容で語られていた。

最盛期には古平の船が99トンまで拡大。しかし、昭和52年に漁業は衰退し、300トンの船も15隻に減少。99トンの船は間宮海峡でニシン漁に従事していた。

「人」については、「若い」が関連性の強い語であった (スコア3.333)。

頻出語からキーワードとした語について、どのように語られていたのか、コロケーション統計のスコアから KWIC コンコーダンスによる解析では、次のような内容で語られていた。おじさんも若い頃は宴会に参加し、ジュースやケーキではなく大福餅を楽しんだ。また、先生方との交流や教室での活動も良い経験だった。ニシン繋ぎや余市資料館の訪問もあり、若い人との交流が充実した。

「海」については、「深い」が関連性の強い語であった (スコア5.000)。

頻出語からキーワードとした語について、どのように語られていたのか、コロケーション統計のスコアから KWIC コンコーダンスによる解析では、次のような内容で語られていた。ニシンは生まれた時は浅い海に住み、成長するにつれて300メートルから400メートルの深い海に移動する。食べ物も変化し、浅い海から深い海に戻ることがある。

「網」については、「入れる」が関連性の強い語であった (スコア2.000)。

頻出語からキーワードとした語について、どのように語られていたのか、コロケーション統計のスコアから KWIC コンコーダンスによる解析では、次のような内容で語られていた。網を海に沈め、型入りが終わると網下ろしを行い、大宴会を開催する。

「油」については、「魚」が関連性の強い語であった (スコア1.250)。

頻出語からキーワードとした語について、どのように語られていたのか、コロケーション統計のスコアから KWIC コンコーダンスによる解析では、次のような内容で語られていた。置き網でエビや小さい魚、魚の卵を捕食し、自分より小さいものを食べて成長する。

「油」については、「取る」が関連性の強い語であった（スコア 1.000）。

頻出語からキーワードとした語について、どのように語られていたのか、コロケーション統計のスコアから KWIC コンコーダンスによる解析では、次のような内容で語られていた。魚の粕を油で閉じ、魚粕にし、干して乾燥させる。

「油」については、「出る」が関連性の強い語であった（スコア 1.000）。

頻出語からキーワードとした語について、どのように語られていたのか、コロケーション統計のスコアから KWIC コンコーダンスによる解析では、次のような内容で語られていた。手間がかかるが、魚粕は茹で、絞り、干す。農業用肥料に加え、魚の油も製品として取り出される。

「油」については、「油」が関連性の強い語であった（スコア 1.000）。

頻出語からキーワードとした語について、どのように語られていたのか、コロケーション統計のスコアから KWIC コンコーダンスによる解析では、次のような内容で語られていた。悪くても良くても、油を利用しかまどから流れるものを使って石鹼などの多様な製品を作る。

全体の講和を分析したところ、3者3様の語りであったため、ここではインタビューを外部変数とした特徴語の分析を行った（表 5-4 参照）。

- ・横野治氏は「船」が特徴語の1位で、「船」との関連性の強い。特徴語から次の内容で語られていた。一度姿勢を整え、船には乗組員が約 20 人が乗り、船にお泊まりすることがある。停泊中は海上にストーブを置いて座る。約 90 から 100 トンの船でニシンを買いに来て停泊する。
- ・丹後藤雄氏は「食べる」が特徴語の1位で、「ご飯」との関連性が高い。特徴語から次の内容で語られていた。安全性を重視し、お魚が取れなくなると収入が減り、ご飯が不足してくる。これが現状で、ますますご飯が不足している。ニシン漁等で魚が獲れなくなると稼ぐことができずに、食も失ってしまう。
- ・長谷川浩作氏は「ニシン」が特徴語の1位で、「ニシン」との関連性が強い。特徴語から次の内容で語られていた。簡単に言うとニシンはイワシの仲間である。

次に3人のインタビューについて、対応分析によってそれぞれの特徴的な語の精査を明らかにしていく（図 5-2 参照）

横野治氏と長谷川浩作氏は「海」「卵」「網」などから鯨漁の方法や衰退、ニシンの生態についての話題が展開されていることがわかる。この話題は今回の講話の中でも中心的なものであり、小学生も一番気になっていた部分であったのではないかと推察される。

丹後藤雄氏と長谷川浩作氏では「人」が話題の中心であった。どのような人がいるのか、どのような人が来るのかなど、人に関連する話が特徴的であり、実際に、道外からニシンを買いにやってくる人についてのエピソードでは非常に関心を示していた。

横野治氏と丹後藤雄氏では漁での生活や過ごし方について中心的だ。特徴語としては、「ねる」「入る」といったような部分がある。当時の漁船の構造について現在と比べて会話している小学生の様子が見て取れた。

以上からそれぞれ以下のことがわかる。

横野治氏は「船」と「船」というワードの結びつきが高く、「船」についての話題がメインであった。

丹後藤雄氏はニシン漁をしていた時の「食生活」についての話が中心的であった。

長谷川浩作氏はニシンの「生態」についての話が中心であった。

このようなインタビューによる語りの内容の違いは、3点考えられる。

第一に、仕事のスケールの違いである。仕事の規模やプロジェクトの複雑さによっても、経験が異なる。大規模で複雑なプロジェクトに携わる場合、新しいスキルを身につけたり、チャレンジングな課題に取り組むことができ、それがやりがいや経験として記憶に残るのではないか。

第二に、チームの違いである。職場の雰囲気や仕事の進め方は、所属するチームによって異なると考える。協力的でチームワークが重視される環境と、個々の自立性が求められる環境では、経験や印象が異なるに違いない。

第三に、状況やタイミングの影響である。仕事においては状況やタイミングも重要であり、同時に時代も関係してくる。漁業の進行状況や市場の変動、経済の影響など、外部要因によっても経験が左右されるのではないか。

以上3点が反映されたため、話題提要はしたもの、三者三様という結果に結びついたのでないか。

表 5-1 調査概要

日にち	2023年11月7日
場所	北海道古平郡古川町浜町 「ほほえみくらす」
対象	4年生
科目	総合的な学習の時間
テーマ	「図鑑をつくろう」
方法	観察・分析・評価

表 5-2 観察・分析・評価のポイント

<p>【観察】 3 グループに分かれた名士インタビュー（録音、写真撮影、質問）</p> <p>【分析】 音源のテキスト化、KH-coder によるテキストマイニング</p> <p>【評価】 生徒の作文を解析（KH-coder）し、学習内容をどの程度理解したかを明らかにする</p>
--

表 5-3 古平小学校「総合的な学習の時間」話題提供リスト

<p>1. ニシンの生態について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ニシンはどのような魚ですか？大きさや形などについて教えてください。 ・ニシンはどのような海域や環境を好んだのですか？ ・ニシンは主に何を食べて成長・繁殖しますか？ ・ニシンには天敵となるような魚はいましたか？ ・ニシンはどのように成長し、どのように年をとりますか？ ・ニシンの生態に関する興味深い事実やエピソードを教えてください。
<p>2. ニシン漁に関わる仕事や組織について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ニシン漁に関わる主な仕事や役割にはどのようなものがありましたか？漁師だけでなく、陸での重要な仕事や役割も教えてください。 ・ニシン漁における船の役割について教えてください。船の種類や装備、船長の役割などについて詳しく知りたいです。 ・ニシン漁において、気象や気象条件はどのように重要ですか？気象予報や気象情報をどのように活用していますか？ ・ニシン漁の歴史的な組織や協力体制について、思い出深い事例やエピソードがありますか？
<p>3. ニシン製品や流通について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ニシンはどのような製品に加工されますか？例えば、メ粕や身欠きなどの加工品を教えてください。 ・ニシンの製品はどのように作られるのですか？加工の工程を教えてください。 ・ニシンの製品が市場に出るまでの流れはどのようなものですか？漁師から消費者に届くまでの流れを教えてください。 ・ニシンの加工や保存に特別な方法が必要ですか？例えば新鮮さを保ったり、出荷したりするときには、どのようにしますか？
<p>4. ニシン場の生活について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ニシン漁が盛んだった頃、ニシン場の親方や漁師はどんな食事を主に摂っていましたか？その食事の食材や調理法についても教えてください。 ・ニシン場の漁師は、船の上ではどのような食事を摂っていましたか？特別な料理やおかずはありましたか？ ・ニシン漁に関連する特別な祝いや行事がありましたか？その際にどのような料理が提供されましたか？ ・ニシン漁の衰退によって、食事の習慣にも変化がありましたか？ ・ニシン場で着られていた特別な服装や装飾はありますか？

表 5-4 インタビューイーを外部変数とした特徴語分析

横野		丹後		長谷川	
船	.066	食べる	.111	ニシン	.192
来る	.044	魚	.098	言う	.071
古平	.039	思う	.082	見る	.071
知る	.032	言う	.081	思う	.059
聞く	.031	人	.081	人	.058
話	.028	次	.071	聞く	.056
持つ	.027	教える	.044	網	.056
大きい	.027	行く	.041	海	.049
イカ	.024	先生	.038	北前	.046
身	.024	漁師	.038	漁	.046



図 5-1 インタビューイ-3 者の抽出語 150 語 (注) 上位 27

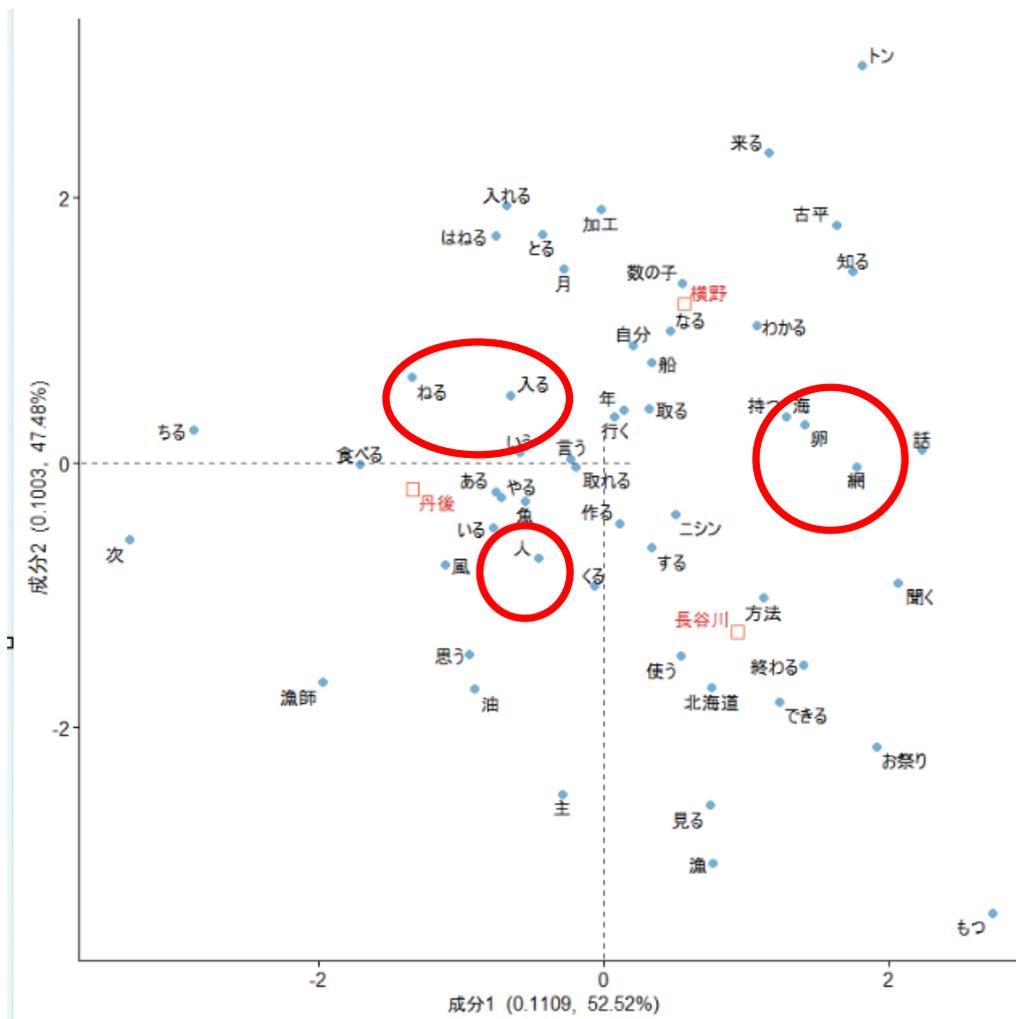


図 5-2 インタビューイ-3 者の対応分析

第6章 小学校4年生の振り返り作文の分析

これまでに、前章ではインタビューイ-1について分析を進めてきた。では、それぞれ地元名士が語られた内容について、小学生はどのように理解したのか、「振り返り」作文を

テキスト化して分析を試みた。KH-coder による分析を行い、共起ネットワークを用いる（図 6-1 参照）。共起ネットワークとは同一の語を線で結んだネットワークのことである。使用語は 115 語である（n=115）。

・グループ 01

01 では「おぼれる」「かける」「びっくり」「とても」という 4 つのワードからなる。漁業をしてきた中での苦労話やハプニング等の話題を 4 つの語を中心に考察している。

・グループ 02

02 では「ニシン」「こと」「する」という 3 つのワードからなる。ニシンはどのような魚なのか、漁業形態はどのようなものであるのかという部分の理解が一番高かったように見える。鯨漁の話題がメインなため実際にニシンという魚についての印象が小学生の中には強かったと考えられる。

・グループ 03

03 では「ほほえみ」「クラス」「今日」という 3 つのワードからなる。ここでは調査当日の施設の名前が中心に当日のことが語られているが、本来の、インタビューイーが伝えなかったであろう内容は伝わっていないと解釈できる。施設が広かったということ等が感想として挙げられていた。

・グループ 04

04 では「できる」「3」「年」「しる」「なる」「はじめて」という 6 つのワードからなる。ここでは、ニシンの生態や、ニシンの出荷・加工方法等の初めて知る内容が記載されていたことがわかる。昭和の中頃から鯨漁の衰退により、遠洋漁業になっているという部分から現在の若者は鯨漁の歴史、ニシンの加工、集荷等を知らないという状態にあるということがわかる。その面のみを考えると今回の講和の機会というものは貴重なものであり充実した授業展開であったのではないかと考えられる。

・グループ 05

05 では「そう」「ふく」「れる」「ない」「つくる」の 5 つのワードからなる。「ふく」というのは衣類の話題であり当時の服についての感想が挙がっていた。05 は全体のワードとの関連性は低い。しかし、05 で特に見えてくるのは言葉の問題である。実際の振り返り作文を読んでも、非常に言葉の理解が乏しいというようなことがわかる。また、インタビューイーの方言や話の内容からも小学生の理解には繋がっていない部分も多くあるということがこの分析を通じて結果として表れている。

その結果、図 6-1 の共起ネットワークの分析結果のように、「ニシン」という魚について、それに関連する漁業形態は理解されていたものの、インタビューイーが伝えなかった鯨漁での生活や漁の道具（船や網）については理解されていなかったようである。

その原因は、3 点考えられる。

第一に、インタビューイーと小学生のコミュニケーションの問題があると考えられる。実際の現場でのヒヤリング調査ではインタビューイーと小学生の間に教員や大学生（調査のために立ち会った）が入ることで会話が成り立つという場面が何度もみられた。インタビューイーと小学生の会話が少ないのは言葉の問題も考えられる。実際に、インタビューイーの話を聞くと方言や訛りが強く、いくら地元の小学生とはいえ理解が出来ないという状況であった。

第二に、事前学習の内容に関する問題である。今回の総合的な学習の時間では「図鑑をつくらう」というテーマのもと展開されている。その中で今回の地元名士の講話というものは数ある授業中でもメインであるに違いない。講和を活かしていくには事前学習が重要である。第一の要因でも挙げた「言葉の理解」という問題にも関連してくるが、インタビューイーは専門用語や小学生では知らないような言葉を用いて講和を進めていたために小

学生からすると何を話しているかさっぱりわからないという表情をしている小学生も見受けられた。

第三に、授業時間又は、授業計画での時間配分の問題が考えられる。今回の講話では何を児童に理解してほしいのか、インタビューイから何を学んでほしいのかを明確にし、授業時間を組むべきである。この問題を踏まえたうえで授業時間を構成すれば、「言葉の理解」に関する問題や講和後の振り返り作文の内容にも変化が生まれてくるはずだ。また、振り返り作文では「びっくりした」「すごかった」という語が用いられるケースが多くみられた。更に、今回の講話とは全く関係のない施設のことについて記載している小学生も多く本来の意図とはかけ離れているような内容もみられた。しかし、これが現実である。特に小学生というのが大きい。このことを教員はあらかじめ把握し少しでも内容に沿った学びができるよう支援し行くことも求められるのではないか。

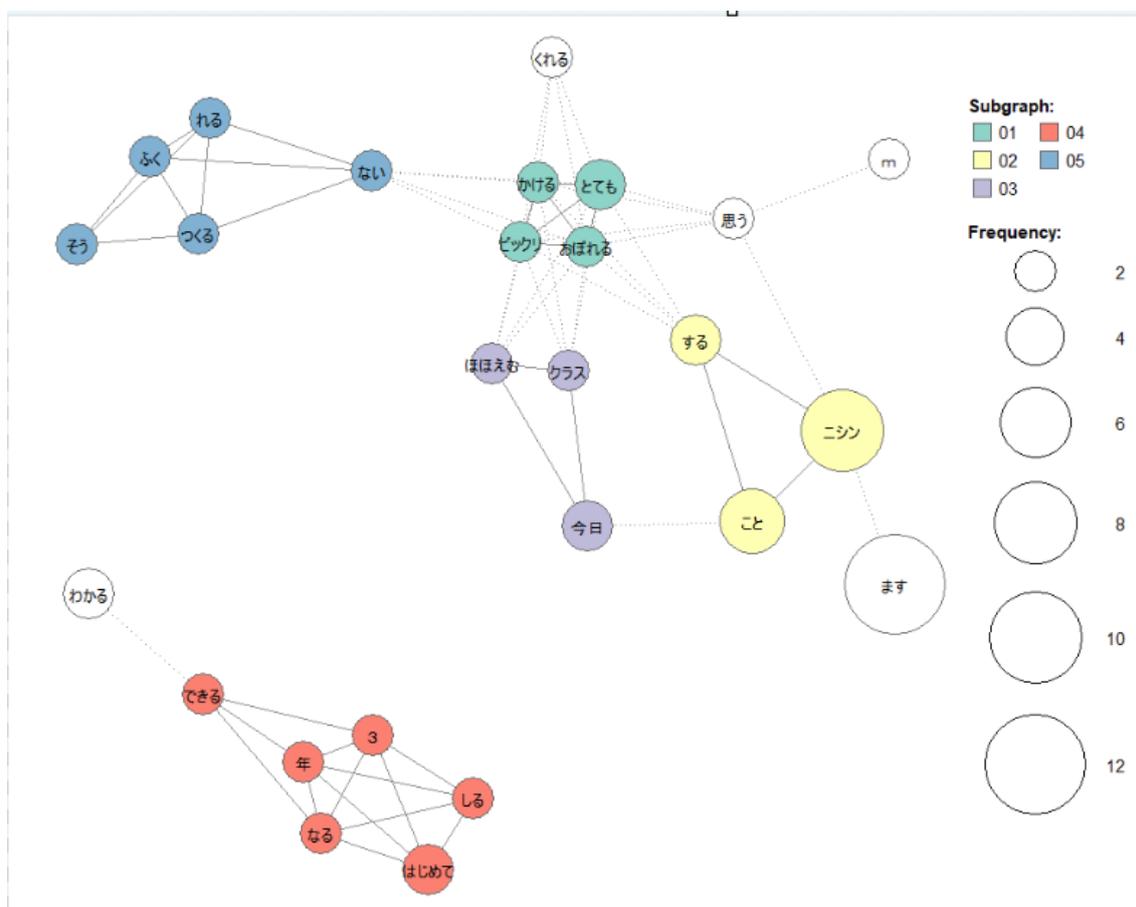


図 6-1 小学生の振り返り作文のテキスト化後の共起ネットワーク

第7章 提案

道教委では、総合的な学習の時間の課題設定は各学校で違いは出るが、地域資源（ヒト・モノ・コト）に注目することの必要性がうたわれていて、地域資源について学んで観察していくことが求められることから今回のような地元名士の講話という形で鯨漁という地域資源を用いた学びを展開してきた。ここでは、前章で上がった問題点を解決するために3つのことを提案する。

第一に、コミュニケーションの向上である。具体的には専門用語の調整ということからインタビューイーが使用する言葉を、小学生が理解しやすい形に調整することが必要である。特に今回のように地元の方言や訛りがある場合、通常の日常会話で使用される表現に置き換えることで、コミュニケーションが円滑になる。その為に、インタビューイーと小学生の間に、今回よりも手厚いサポートスタッフや教員を配置することで、言葉の問題を克服しやすくなるのではないか。彼らがコミュニケーションの架け橋となり、円滑な対話ができるようなサポート形態を目指す。

第二に、事前学習の強化である。学習コンテンツの理解という部分から講話の専門用語や難解な言葉を学ぶ前に、事前学習としてその内容を理解するための教材を提供する必要がある。これにより、小学生は授業中に理解が進み、講話に参加しやすくなると共に内容に興味も沸く。その為に、コンテキストの明確化の為に、講話の目的やインタビューイーからの期待を明確にし、それに基づいた学習目標を生徒に示す。事前学習を通じて、生徒たちがより授業に参加できるようにする。

第三に、授業時間の効果的な活用である。具体的な学習目標に基づいて授業時間を設計し、児童が理解してほしいポイントに焦点を当てる。講話後の振り返りやディスカッションに十分な時間を確保する為の、時間配分の検討が必要である。また、児童の個別サポートも重要視し、児童が振り返り作文で「びっくりした」「すごかった」というような表現を使う場合、具体的な体験や感想に基づいた表現を引き出すようなアプローチを心掛ける。また、学習内容に関連のない内容については、適切な指導やサポートを通じて焦点を戻すように工夫する。

これらのアプローチを組み合わせることで、コミュニケーションの向上、事前学習の強化、そして効果的な授業時間利用が期待されるのではないか。

おわりに

本論文では、北海道古平町立古平小学校をモデルとして、小学生の総合的な学習の時間の実態について、学校が所在する地域の特性は異なるのだから、その特性をどのように「探求的な学習」に結び付けていくのか、総合的な学習の時間に関する問題点に意識をもって執筆した。

この疑問に応えるために、先行研究で挙げられている実用性が低い問題、言葉の理解が困難な問題、課題の幅・内容に関する問題、評価の難しさに関する問題を明らかにするために、授業の事前事後に着目し、ヒヤリング調査、ヒヤリングデータの分析、小学生の振り返り作文の分析を行ってきた。その結果、コミュニケーションの間・、事前学習の内容に関する問題・授業時間又は、授業計画での時間配分の問題があり、その中でも言葉の理解に関する問題や事前学習の内容の検討が必要であるということが明らかになった。様々な問題点があるということが明らかになった一方で、今回の古平小学校で展開されていた総合的な学習の時間は道教委が定めている「地域（ヒト・モノ・コト）」という目標に沿った内容で授業が展開されているということも明らかになった。北海道は特に地域資源が豊かであるという恵まれた環境であるということから今後も継続した地域の特性を生かした学習を展開していくべきだと強く感じた。また、今回のようなインタビューイヤーは高齢であることから講話の内容を次世代へ継承し、地域の文化や歴史を受け継いでいくことが重要である。

今後の日本は、以前よりも厳しい環境になることが予想される。教育現場では今後を見据えた教育を展開していかなければならない。主教科はもちろんだが、総合的な学習の時間のような幅広い内容を扱うことのできる教科を活かし、広い視野で様々な視点から物事を考える力を育成していく必要があるのではないか。教育現場には様々な問題があるが、私は学習する児童の為に、教育現場の学習プログラムの改善を期待したい。

参考文献・資料

- ・総合的な学習の時間における検証と今後の方向性について
[file:///C:/Users/fuuse/Downloads/kiyo57-2-4%20\(3\).pdf](file:///C:/Users/fuuse/Downloads/kiyo57-2-4%20(3).pdf)
- ・北海道教育委員会 HP 校内研修パッケージ
https://www.dokyoι.pref.hokkaido.lg.jp/fs/8/2/2/7/5/0/5/_/01_%E3%80%90%E3%82%B9%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%89%E8%B3%87%E6%96%99%E3%80%91.pdf
- ・「総合的な学習の時間」の意義と課題
<https://www.kknews.co.jp/rensai/sougou/reso9905.htm>
- ・総合的な学習の時間の実施状況に関する研究

https://www.kyoikukensyu.metro.tokyo.lg.jp/09seika/reports/files/bulletin/h13/h13_05.pdf

- ・「総合的な学習の時間」に関する情報（実践事例）

<https://www.edu-ctr.pref.nagano.lg.jp/kjouhou/kyouka/data/sougou/1syo.htm>

- ・「総合的な学習の時間」の評価に関する研究

https://www.saga-ed.jp/kenkyu/kenkyu_kiyo/pdf/26sougou_chuu.pdf

- ・北海道教育委員会校内研修パッケージ（hokkaido.lg.jp）

https://www.dokyoι.pref.hokkaido.lg.jp/fs/8/2/2/7/5/0/5/_/01_%E3%80%90%E3%82%B9%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%89%E8%B3%87%E6%96%99%E3%80%91.pdf

- ・総合的な学習の時間 の成果と課題について

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/_icsFiles/afieldfile/2018/10/10/1409925_4.pdf

- ・教科横断的な学習指導計画

<https://kyouzai.jp/wpcontent/uploads/2021/06/%E9%96%89%E6%A0%A1%E3%81%AB%E5%90%91%E3%81%91%E3%81%A6%E3%81%AE%E5%AD%A6%E7%BF%92.pdf>

- ・第5章 学校における実践事例

<https://dl.ndl.go.jp/view/prepareDownload?itemId=info%3Andl.jp%2Fpid%2F11338803&contentNo=10>

- ・小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編。

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_013_1.pdf

- ・札幌市HP。

<https://www.city.sapporo.jp/kyoiku/top/sougougakusyu/sougougakusyu.html>

謝辞

卒業論文を作成するにあたり、多大なるご指導とご鞭撻を賜りました、札幌大谷大学社会学部地域社会学科教授、森雅人教授に謹んで感謝の意を表します。

また、本稿の査読にご協力いただいた札幌大谷大学社会学部地域社会学科教授、西脇裕之教授及び森ゼミメンバーの川上智成氏、飯田柊哉氏、高間保仁氏、松田健杜氏、槇海斗氏、諏訪祥大氏、東陽太郎氏、種村友希氏、杉内萌夏氏にあわせて感謝の意を表します。

本研究並びに、卒業論文に関するヒアリング調査並びに資料を提供して下さった、古平町立古平小学校の皆様、地元名士、横野治氏、丹後藤雄氏、長谷川浩作氏に深く感謝の意を表します。

最後に、今まで私の成長、長期に亘る大学生活と野球を見守り、支援してくれた家族に深く感謝いたします。